

東日本大震災での支援へのお礼

所長 君塚葵

本年3月11日の東日本大震災に際して、東大整形外科医局より多大な義援金を頂き、有り難うございました。民営の福島整肢療護園を中心にお贈りさせていただきました。利用されている障害の子どもたちのために、使わせていただくとの礼状を頂いています。各施設を代表して、重ねてお礼申し上げます。

東北地方にある9つの肢体不自由児施設は8つが県立であり、いわき市と八戸市にある2施設がかなり海岸に近いところにありますが、いずれも津波に襲われることはなく、直接の人的被害は、仙台市在住の職員スタッフのご家族にとどまるのみとなりました。しかし、いわき市にある民営の福島整肢療護園は福島原発から38kmの地点にあり、原発事故の水素爆発の折には市内全体がパニック状態に陥ちり、全店が閉鎖し脱出者で大混乱したとのこと。マグニチュード7の余震もあり、海岸沿いの津波被害、原発事故の蔭がいろ濃く残っているのはマスコミで報道されているとおりです。

全国の肢体不自由児施設の間には、施設長事務長をメンバーとしたメーリングリストが、日頃から活用されており今回の震災についても、刻々と情報を共有しました。また、厚労省との連携、文部科学省との情報交換、製薬会社への支援、民主党政調のヒアリングや内閣府危機管理センターとのやりとりをおこない、少しでも役に立てればと皆で動きました。そのメーリングリストでのやりとりを中心に、当時の状況を改めて振りかえりたいと考えます。少し長文となりますが、メール内容の氏名を伏せて、「」内に入れました。なお、2か月強の間に、私が送信したメール数は東大整形外科を含めて150ほどとなっていました。

渋谷での会議に出ていて、半帰宅難民状態で整肢療護園にもどり、小さな落下物の程度にとどまったことを確認し、翌日、東北各施設に電話・メール連絡をしましたが、通じませんでした。13日に八戸の施設長からメールが入りました。「津波はここまでは届きませんでしたし、揺れで多少建物にヒビは入りましたがヒト、モノとも被害はありませんで、園長室と自宅自分の部屋の散乱が一番の被害でした。停電中の暖も、今正月の大雪による山間部の停電を教訓として、照明器具や石油ストーブを用意したのが功を奏しました。しかし、予備電源の寿命は3日で、もう半日が限界でした。水道ガスが使えるとはいえ余震もあり、調理場には照明が届かず冷蔵庫は使えないため非常食を主体とし、停電や津波被害で避難所行きの職員を合宿させて居残りの子ども達50人の相手をしてもらいました。携帯も固定も電話はつながらず、安否情報のNTT災害伝言サービ

スは青森県は対象外、NHK 安否放送申し込みもつながらず、ようやく地元民放ラジオで無事放送を流してもらいました。」

また、福島整肢療護園の核となっている〇先生からの伝言が入ってきました。「現在の当園の被災状況がどうなっているのか、僕には全く分かりません。実はプライベートな用事がありワイフと一緒に 11 日から東京に出ている、そこで地震に遭いました。何とか上野までたどり着きいわきに帰ろうとしたのですが、既に遅く、常磐線、高速バスなどの移動手段は全て止まっていました。その夜泊まれるホテルは見つからず、追い出されるまで上野駅構内で座り込み、上野公園の東京文化会館が開放されてからは、床に新聞を敷きシートを体に巻き付けて、避難民としての一晩を過ごしました。12 日以降、いわきとはほとんど音信不通状態で、施設の状況は全く把握できません。僕たちの現況をメールで伝えるのが精一杯でした。13~14 日と何とか都内のホテルを確保し、交通手段の復旧を待っているのですが、あっちこっち手を回して集めた情報によると道路は寸断され、鉄道も取手からいわきまでの見通しが立たないと言われ途方に暮れています。」その後、3月15日に、福島整肢療護園の〇先生ご夫妻は福島空港へのキャンセル切符を入手され、午後2時半に羽田を出られます。福島空港、郡山からは1日1便のいわき行きのバスの乗れて、当日帰園されました。「〇〇先生から羽田-福島間のANAの臨時便を教えていただき、14日の午後には空港からいわきまでのバスが1日1本だけですがまだ動いていることが確認できました。直ちに電話予約を試みたのですが全く繋がらず、苦し紛れに試したインターネットで、その日の夜にやっと翌日のANA便を確保できました。被爆を恐れてのキャンセルだったのかも…。15日は14時35分に羽田を出て、15時30分頃には福島空港に着きました。空港を降りて驚いたのは建物の1階から3階まで全てが福島県を出て行く人達の避難所と化していたことです。通路にまではみ出して敷かれた毛布の上に大人達が座り込み、周囲をたくさんの子供たちが走り回っていました。大人達は一様に疲れた顔で、満席を伝える無情なアナウンスを聞いていました。いわきはまだ断水と聞いていたので、水のペットボトルを買い込もうとしたのですが、自販機は水どころか全て売り切れでした。バスでいわきまでは1時間30分ほどです。50人は乗れるバスに乗客が10人前後で、中には食料の入った大きな箱を何段も抱えていわきの親戚へという方もいました。いわき市内には行って驚いたのは街の暗さです。まだ9時前なのに車窓から見えるいわきには30万都市の面影は全くなく、闇の中にぼつぼつと光る街灯の明かりに暗く浮き上がるビルの影が精一杯でした。まるで、住人のほとんどが逃げ出した町のようなようでした。こんなところに帰ってきてしまったか。けっこう気持ちが落ち込んだのですが、日帰りのつもりで駐めた駅の駐車料金 32,800円を払った時点でカツ！が入りました。施設の状況はもう少し状況を把握してからお知

らせします。」

当初、情報把握がなかなかできず、〇〇〇〇製薬会社の連絡網をお借りしようと、東京本社に依頼したところ、「社内情報では弊社の東北支店(仙台)はビルが閉鎖されました。医薬品卸も物流センターが打撃を受け配送能力が大幅に低下しています。かなり厳しい状況です。まずは引き続き安否確認など状況把握します。」、支社から「平素は大変お世話になっております。電話連絡をしましたが全件繋がらないため、メールアドレスが分かる先生にメールにて確認を取っています。はまなす療育センター〇〇先生(八戸市)から返信があり、卸さんに納品の依頼をしました。」 また、仙台市の肢体不自由児施設から製薬会社にメールの返信がありました。「メールありがとうございました。地震発生直後から3日間病院に詰めておりました。今夜、久しぶりに自宅で寝ることができそうです。電気も回復してお返事出すことができました。しかし、病院自体は電気、水道、通信の全てが未回復で、困難を極めております。とくに秋保地区はインフラの回復が遅く、今夜も自家発電でなんとか稼働している状態です。もしも、ご協力いただけるようでしたら、軽油、飲料水などがぎりぎりの水準ですので、確保いただけますと大変に助かります。明日からまた、泊まり込むつもりです。流通など不安な状態がしばらく続くと思いますが頑張って参ります。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。」

これらの厚労省への当初の連絡に対し、「お世話になっております。厚労省障害児担当専門官〇〇です。被災地施設の状況をお伝えいただき、ありがとうございました。拓桃医療療育センターの状況は分からず心配しておりました。昨夜、私の方でも面識のある宮城県職員の方に連絡させていただき、拓桃医療療育センターの情報をいただきました。自家発電の燃料枯渇も想定し、人工呼吸器等の使用者については東北大学病院で受入していただいたこと、現場では相当のご苦勞をされていること等をお聞きいたしました。電話やメールが不通なので、今後は県職員が直接施設に伺う等して状況の確認をし、対応できることはするとおっしゃっていただきました。厚労省においても、常に医療を必要とする肢体不自由、重症心身障害の方々のことについては、施設・在宅問わず大変気にかけております。我々も関係機関から情報収集するとともに、先生からいただいた情報については、部内で共有させていただきます。」その後、拓桃医療療育センターとしばらく連絡がつかなくなっていました。

3月17日に、郡山市の施設から連絡が入りました。「いろいろとご配慮ありがとうございます。当センターの現況を報告します。電気、ガス、水道、重油(残は少ないですが、施設に優先的に納入してくれるようです)なんとか確保できています。しかし、給食の食材は3月25日頃まで、薬品・薬剤は製薬会社の配送用のガソリン不足で配達できず、かなり不足しています。当センターは職員93名が自家用車通勤で、ガソリン

不足のため通勤できない職員がかなり多く、施設の機能を維持するのも難しい状況になりつつあります。原発事故の関係で当センターのある郡山市も、いつ避難命令あるいは屋内待機指示がでるのか分かりません。職員も児童も毎日不安を抱えながら生活しておりますが、職員一同このような非常時だからこそ知恵と工夫で今出来ることを一生懸命やっております。福島県総合療育センター 事務長〇〇、「一夜明けてライフラインは復活したので（郡山市ではまだ断水の箇所もあります。）、翌日には入所児を全員病室に戻すことができました。余震は徐々におさまりつつありますが、原発の事故のため郡山にも放射能が飛散してきております。（現段階で放射能の濃度はいわき市より高い値にあります。：人体に影響を及ぼすほどではありませんが）ただ原発から約60km離れていますので、避難等の区域には入っていません。ガソリン、食料などの物資の状況は福島整肢療護園ほどではありませんが、他の被災地とあまり変わらないというのが現状です。入所児童の食事を25日まで何とか確保したところですが、ガソリン、放射能の関係もあり、通勤できる職員も徐々に減ってきており、自宅に帰せる児童はなるべく帰し、2つの病棟の児童を1病棟にまとめ、最小人員の職員で運営しています。外来は定期薬のみの対応にして、外来訓練は16日から中止しています。物資のない中、忍び寄る放射能の恐怖に怯えながら、日々の生活を送っています。ところで福島整肢療護園への支援ですが、重心病棟38名のうちの児童3名を本日引き受けました。また〇〇先生のご配慮で、〇〇〇〇〇〇からの支援物資を当センターまで届けてもらい、3名の重度な入所児を運んできたバスに乗せていわきまで届けたところですが、また〇〇製薬からはソイジョイ、カロリーメイト、水などの物資が届き、併せて療護園のバスに乗せました。今後、福島整肢療護園のバスが緊急車両として認められれば、高速道路が使用でき、サービスエリア内のガソリンスタンドからの給油が可能になるようです。そうすれば福島整肢療護園のバスが郡山まで来ることができ、各地からの支援物資が当センターまで届けば、その物資をいわきまで運ぶルートができそうです。平成23年3月17日 福島県総合療育センター」

製薬会社がバスをチャーターし、直接支援物資を現地に送るとのことで、便乗させてもらい、当初はこの直接バスで、郡山市（福島総合療育センター）、仙台市（宮城県医療療育センター）の施設に必要なものをすこし届けることができました。郡山からの要請物資は施設の特徴を反映していました。「医薬品」としてフェノバール散 10% 500g/缶、デパケン細粒 40% 500g/缶、ラミクタール 2mg錠 140錠/箱、エレンタールP(80g) 10包/箱、エンシュアリキッド 250ml 24缶/箱、セレニカR顆粒 40%500g/缶、医薬部外品、増粘剤（トロミ剤）失礼ではございますが、数は可能な限りご支援いただければと存じます。特にエレンタールがまもなく在庫が切れてしまいます。」

「茨城県立こども福祉医療センター医務局長の〇〇です。遅くなりましたがこの度の東北関東大震災における当センターの状況につきご報告申し上げます。当地も震度6強の地震にみまわれ、老朽化していた3階建ての病棟に少なからず、ダメージがありました。すでに地域的には電気、ガス、水とも14日月曜に復旧しておりますが、病棟内の半分程度のガラスが割れ、給水塔の貯水が不可能となったため、現在、尚、病棟で水が出ません。ボイラーからの給湯、蒸気パイプにも損傷があり、入浴が出来ない状況です。暖房については灯油ストーブで対応しています。以前の耐震審査ですでに建て替えを勧告されていることも含め、地震当日に隣接する養護学校寄宿舎に入所児を全員移し、現在もそちらで診ております。呼吸器を使う児童が二名おりましたが、ポータブルの発電機を2機使用し、通電まで何とかしのぐことができました。肺炎で入院加療中であった児童は病状悪化のため、こども病院で受け入れいただき、帰れる児童はできるだけ自宅で見えていただき、現在は18名のみ病棟管理中です。

食料や水は当初は備蓄分で何とかしのぎ、現在はまだ細々ですが、支援物資等が届くようになりましたので、少し落ち着いてきております。ただ、ガソリンは当地でも不足しており、職員の通勤の問題は逼迫してきております。また、ボイラー用の重油、暖房用の灯油なども残量が少なくなってきました。明日にはボイラーの問題や余震に対する不安などが残りますが、もとの病棟へ戻る予定です。このような状況のため、福島整肢療護園の問題では、当センターは近く、受け入れにご協力できればよいのですが、現状では困難です。病棟の機能が落ち着けば改めて検討させていただきたいと存じます。とりあえず、当センターについては何とか県などの支援のもと、復旧しつつありますので、現状では特に運協からの支援は必要ありません。より被害甚大であった施設への支援をお願いするとともに、当センターでもご協力できる部分については努力する所存です。以上、簡単ですがご報告申し上げます。」

「岩手県立療育センター（盛岡）は岩手県の内陸部にあるため被害は少なく、建物に大きな損壊はありませんでした。しかし、傾斜地に建つ老朽化の進んだ施設であるため、再度、屋外への退避が必要になった場合に備えて、まだ準非常時体制で病棟管理をしています。外来診療は整形外科・小児科はかろうじて通常診療体制をしいています。（ガソリンがないので受診できない児が多く、外来は閑散としています。）沿岸部からの搬送ルートが確保され始めたので、昨日からポツポツと沿岸部の避難所にいる肢体不自由児を入所またはショートステイ扱いで受け入れ始めました。本日はレスピレータ管理の超重症児が大船渡から転院してきました。停電の間、自家発電の燃料確保がなかなかできず、レスピレータ管理の子供達のことを最優先課題となりましたが、停電から復旧してからは差し迫った生命的危機の問題は一旦、解消しました。こちらもガソリンやボイ

ラー用の重油を入手できないため、食料の調達と暖房、職員の通勤困難が問題となっています。また、紙おむつや洗剤のストックが尽きるのも時間の問題となってきました。しかし暖房は必要最小限で電気ヒーターを使用しており、めっちゃエコな診療体制ですが状況は悲惨ではありません。状況は良くはありませんが、全体として非常事態の対応は冷静にできており、落ち着きつつあります。今後、沿岸部からの受け入れ児が何名になるかで他施設に対してどのようなかたちの協力が可能かを判断することになるかと思われまます。運協メンバーのメールはすべてチェックしていますが、こちらが協力できることがあればご連絡下さい。」その後、この施設では4月上旬より県の要請を受けて、沿岸部への支援を担うこととなり、12名体制の相談支援部を立ち上げ、市町村の要請を受けて、STや心理症6名が現地に入り、巡回相談を交えながら保健師らと連携しています。他の6名が情報提供や相談支援の窓口を作り、ポスター作成、ちらしの案内、装具や手帳再交付、特別児童扶養手当受給などの仕事をしています。

3月17日に、福島整肢療護園では、若い看護師を主に20%以上の職員が県外へ自主避難をしていることと被爆を考量して18歳未満の児童を他施設へ移すという内部決定をされました。それ以上の年齢で、重症者は移動での負担に耐えられないとの懸念もあり、様子をみてゆくこととされ、受け入れの依頼がありました。ご家族の意向を最優先しながら、引き継ぎを事前にしっかりと行い、受け入れ施設から直接迎えに行くこととし、連休明けの22日に静岡・山梨・神奈川・東京・栃木・長野・群馬の各施設から緊急車両のステッカーを貼った向かいの車が医療スタッフを乗せて出かけました。急だったので、板橋からは私と看護師と事務職で常磐高速でいわきに向かいました。この際、厚労省からメールが入っており、「話は変わりますが、昨日、午後8時ごろ板橋警察署から「緊急車両」の許可についての確認の電話がありました。福島整肢療護園の被災状況と〇〇先生の救援物資運搬等の対応については、厚生労働省も把握しており、特段のご配慮をいただきたいとお願いいたしました。担当者からは口頭記録で対応すると言っていました。ありがたいことです。」受け入れ後は、施設間でテレビ電話で顔をみながら受け入れ児が福島整肢療護園のスタッフとやりとりしたり、4月の入学式を迎えた子どもは送られてきた新一年生の服を着た式のカメラ写真をご家族に送ったりしました。結局2か月余りでいわきに戻りました。この児童の移動で、福島整肢療護園の減収は1億4千万円ほどと計算されましたが、自主避難であるので保障が微妙ですが、とりあえず、厚労省では保障対象とする案を担当部署に提出しているとのこと。

3月22日のいわきは、午後3時頃ですが、人通りが絶え、開いている店舗は2～3しか見あたらず、ひっそりとしていました。ちなみに、いわきは福島県でもっとも人口の多い所です。断水が解消されたのは3月30日でした。福島整肢療護園の先生と握手

をした時の手の冷たさが、体中を駆けめぐったような気がして、暖房の不足が深刻なことを知りました。要望のあった物資を、板橋やいわきの流通センターに送付して貰い、物資の支援は順調になりましたが、当初は暖房器具が東京でも入手が困難でした。

初動の時期を過ぎて、義援金を募ることとなりました。東大同窓会連絡で茨城県での状況が医局の先生方より報告されていましたおりに、仙台の国分先生のメールを転送したところ、医局において中村耕三教授、医局長らが支援をすると決めていただき、教授の決断で多額の義援金を頂くこととなりました。

メンバーからは「さすがに東大だ」、「高木憲次先生の療育への情熱が続いている」との声があり、たいへん嬉しく思っています。震災報告と義援金へのお礼ですが、肢体不自由児施設の状況を少しでも伝えたいと考えています。